

# 早稲田大学視察報告書

## 1. 日時

日時: 9月7日(木)14時～

場所: 早稲田大学(西早稲田キャンパス)障がい学生支援室

障がい学生支援室の職員に対応していただいた。

## 2. 目的

東海大学での支援室設立に向けて、他大学の設立の過程や、情報収集のための視察。早稲田大学は、東海大学と同じ総合大学であるから、比較がしやすく、今後の参考になるはずである。

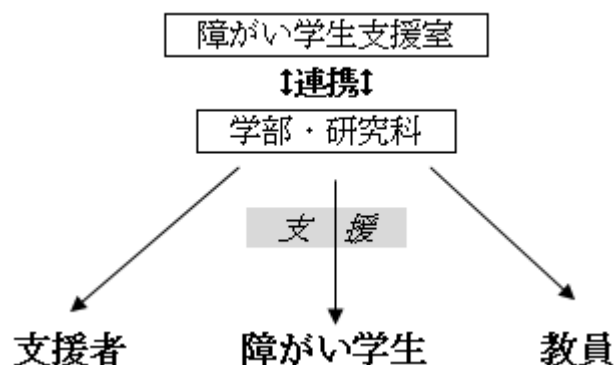
## 3. 学んだこと、発見したこと

### 3-1. 早稲田大学障がい支援室とは

早稲田大学の在籍する障害のある学生(聴覚障害、視覚障害、肢体不自由)を全学的に支援するため、2006年3月に設立された。今年は、聴覚障がい学生が4名入学。

障がい学生支援コーディネーターが常駐し、各学部、研究科との連携のもとに障がい学生に対して、学業上必要な支援サービスを提供している。

具体的な業務として、障がい学生との面談、支援者養成講座、支援者派遣のコーディネートなどを行っている。



#### ①障がい学生に対するサービス

##### 共通サービス

- 期末試験時の配慮の調整
- 教員への配慮事項の伝達

- 各種情報の提供
- 個別相談

#### 聴覚障がい学生に対するサービス

- ノートテイク
- パソコン通訳(連係入力)
- 記録
- パソコンテイク(一人入力)
- 手話通訳
- 音声教材の文字起こし

#### 視覚障がい学生へのサービス

- ガイドヘルプ
- 教材のテキストデータ化
- 代筆
- 教材の点訳
- 代読

#### 肢体不自由学生に対するサービス

- 授業教室の変更
- 移動支援
- 代筆

### ②支援者に対するサービス

支援者が円滑に活動できるように、活動開始時に様々な講習会を実施している。学外者も参加可能。

- ノートテイク・パソコンテイク講座、研修会
- パソコン通訳講座、研修会
- 各種情報の提供
- 移動支援者講習会
- 個別相談

### ③教員に対するサービス

障がい学生を担当する教員に対して、障害に関する基礎知識や配慮方法などの情報の提供をする。

また、障がい学生を指導する際の補助的なサポートを提供する。

- 教員ガイドブックの提供
- 講義やゼミへの通訳者の派遣
- アクセシブルな教材作成の支援(音声教材の文字起こしなど)

## 3-2. 設立の過程

8、9年前に早稲田大学に聴覚障害のある学生が入学し、ノートテイク支援を希望したため、大学側でノートテイカーを養成しようとしたがそのノウハウがなかったので、当初は、その学生が所属していた手話サークルのメンバーがノートテイクをボランティアとして行

っていた。

→このノートテイクに対して支援する側、支援を受ける側に負担・質等の問題がでてきた。そのため、大学の学生生活課が中心となって、外部団体であるサポートセンターにお願いをしてノートテイク養成講座を始めた。

学生生活課がノートテイクの養成講座を外部に委託して行う。

↑  
連携  
↓

学部(障がい学生が所属する学部)がノートテイクをお願いしていた。

(当初、ノートテイクを行う学生の大部分は手話サークル。)

ノートテイクを求める学生が増えてくることで、それぞれの学部でノートテイクのコーディネートをすることは効率が悪く、統一性がないという問題が発生した。

↓そこで

支援を受ける学生、支援する学生、職員の声がきっかけとなり、障がい学生支援室が設立されることになった。

→設立にあたって、現状を伝える障がい学生の声や、他大学の支援体制の例という客観的なデータが必要だった。これらのことを、早稲田の場合、教員ではなく、職員が中心となって訴え続けていった。また、大学のひとつの課だけの問題とせず、教員にうまくいくように根回しをしたり、委員会を作ったりというあらゆる努力をおこなった。

### 3-3. 現在の支援の詳細

#### ①支援者の登録の流れ

講座の受講(希望するサポート手段の講座を受講)

↓

登録の手続き

↓

ボランティア保険の加入(保険料は支援室が負担)

◇ 現在支援者登録をしている人 : 150人~180人

(ノートテイク : 100人)

## ②各支援の詳細

### <ノートテイク>

ノートテイクは1コマにつき2名配置される。ノートテイクは非常に集中力を要するので、ノートテイクの体調維持のため、止むを得ない場合をのぞき、原則として1名では行われぬ。講座を受けなければ、登録が出来ず、ノートテイクができないことになっている。

ノートテイク講座は随時開催している(学期始めの半期に2回その他随時)。開催情報については、ホームページ、Waseda-netポータル、チラシなどで知らせている。90分×4コマのカリキュラムで、聴覚障害や情報保障についての知識、ノートテイクの書き方、ルールとマナーなどについて勉強する。

また、ノートテイク講座を受講して支援室に登録したノートテイクを対象に研修会を設けている。評価ポイントを定めて、ノートテイク個々のノートテイクについて検討するといったようなスキルアップのための研修会や、しばらく活動をしていないノートテイクのための復習講座など、状況に合わせた形で開催する。より現場に近い形で練習するために、教員の協力を得て、学内の講義を撮影し、その映像を用いてノートテイクの練習を行うこともある。

◎謝礼：学内の学生・・・1コマ1000円の図書カード  
：学外者・・・1コマ1000円の図書カード

### <手話通訳>

独自に手話通訳者が登録(学内で養成することが不可能なため、学外通訳者が中心)。

### <視覚障害>

現在、全盲の学生はいないため、視覚の支援は行っていない。点字のプリンタなどはそろっている。要望があれば教材の点訳などの養成講座などを行う。

### <音声教材の文字起こし>

文字起こしの機械はそろっていないため、大学や家のパソコンで行う。

謝礼:テープ、ビデオテープ、DVDの30分ごとに1500円の図書カード

### <肢体不自由>

エレベーターのない建物で、車いすを階段の上まで運ぶ移動支援や、代筆などを行っている。施設はバリアフリーに出来るだけ対応していく。古い校舎にエレベーターはつけられないため、新しく建てたときに整備していく。現在、肢体不自由学生の在籍している学部等を中心としたスロープや、車椅子用トイレ、車椅子用電話などを設置している。

## 3-4. 東海大学に支援室を設立するために

大学に訴え続けることが大切である。早稲田大学も設立する以前は、現在の東海大学と同じような状況だったようである。障がい学生の声や、他大学の支援体制の例を訴えることも大切である。この訴えは学生では限界があるため、職員や教員の力添えがあるとより実現しやすい。

## 3-5. 支援室があるメリット

支援を受ける学生が変わった。設立される以前は、支援ということに学生生活の大部分を費やさなくてはいけなかった。しかし、支援室が設立してこれたことで、支援が当たり前となり、趣味や部活などに打ち込めるようになった。

## 3-6. 現在抱えている問題

1. 身体障害には対応できるが、精神障害・発達障害には対応できるノウハウを持ちあわせていない。大学としてこれからどうしていくべきか。
2. 他のキャンパスに障がい学生がいる場合も対応は、西早稲田キャンパスの障がい学生支援室で行う。しかし、所沢キャンパスのように遠くなってしまうと、学生と会う頻度が少なくなってしまうため難しい。
3. 聴覚、視覚、肢体不自由に対応していくと言っているが、支援室が出来てから、全盲の学生はいない。全盲の学生が入学してきたら、きちんと対応できるか。
4. 障がい学生を完全に把握することはできない。入試でも本人が言ってくれないと、認知できない場合がある。

#### 4. 感想

支援室を設立することは難しいということを改めて実感した。しかし、東海大学と同じような状況から早稲田大学が支援室を設立したということは、今後の私たちの活動に大きな意味を持ったと思う。自分たちの活動をしていくことで、大学に訴え続けることになるのだから、学生としてできる限りのことはしていきたい。

支援室があることで、障がい学生が学生生活をより有意義に過ごすことができる。

#### 5. その他

「早稲田大学 障がい学生支援室」HP・・・

<http://www.waseda.jp/student/shienschitsu/>